

グローバル情報システム戦略比較文化研究に用いる
グラウンデッド・セオリー・コーディング・プロセスの図形化と分析ツールの定型化
Visualisation of Coding Process and Formalisation of Analytical Tool:
Grounded Theory Analysis for Cross-Cultural Comparative Study of Global Strategic
Information Systems Management

松本秀之、デービッド W. ウィルソン

(英国ロンドン大学バークベック・カレッジ・コンピューター・サイエンス・アンド・情報システム研究所)

Hideyuki Matsumoto and David W. Wilson

(University of London, Birkbeck College, School of Computer Science and Information Systems)

[要約] 多国籍企業の経済活動、情報システムのグローバル展開、そして文化的同質化はグローバリゼーションの議論の中で重要なテーマとなっている。情報システム比較文化研究の多くが Hofstede モデルを用いた研究を行っているが、多国籍投資銀行業界に於ける「グローバル情報システム戦略」と「文化」との関係性をシステムティックに捉える事の出来るフレームワークは未だ存在しない。グラウンデッド・セオリーは、この関係性を視覚化することのできる理論の構築に役立つと考えられる。グラウンデッド・セオリーは、教育学、看護学、心理学のみならず政治学あるいは情報システムを含む経営学にまで研究分野を拡大してきており、研究者の先入観を限りなく排除しデータに純粹に立ち返り理論構築することで、極めて複雑に原因結果が絡み合った現象を解釈する研究に用いられている。然し乍、グラウンデッド・セオリーには、コーディング・プロセスの定型化に弱みがあることが指摘されている。そこで本稿は、先ず始めにグラウンデッド・セオリーのプロセスの大枠を理解し、次にグローバル情報システム戦略の比較文化研究に用いることのできるコーディング・プロセスの図形化を行ない、更に分析ツールの定型化を試みる。

[キーワード] グローバリゼーション、情報システム戦略、多国籍企業、比較文化、グラウンデッド・セオリー
[Keyword] Globalisation, Strategic Information Systems, Multinational Corporation,
Cross-Cultural IS Research, Grounded Theory

1. はじめに

本研究「多国籍投資銀行業界におけるグローバル情報システム戦略の比較文化研究」は、①「研究原案」を2004年9月英国ヨークで開催されたオペレーショナル・リサーチ会議(Matsumoto, 2004/2005b)に於いて、②「パイロット研究の成果」を同年12月米国ワシントンで開催された IFIP8.2 のワーキング・グループ・ミーティング(Matsumoto and Wilson, 2004)に於いて発表を行なった。翌2005年、③「グローバル情報システム戦略比較文化モデル(英語名: Cross-Cultural Comparison Model of Global Strategic IS Management; 英語略名: CCCM-GSISM)の理論構築及び理論検証」を、4月英国ニューキャッスルで開催された UKAIS(英国情報システム・アカデミー; Matsumoto, 2005a; Matsumoto and Wilson, 2005a)に於いて行なった。続いて④「CCCM-GSISM と日本の伝統文化との関係性」を、7月タイ・バンコクで開催された PACIS(太平洋情報システム会議; Matsumoto, 2005c)に於いて、⑤CCCM-GSISM を統合することで洗い出された「情報システム・アウ

トソーシングの受け入れ先としてのシンガポールの競争優位性」を、9月米国ワシントンで開催されたCGO(グローバル・アウトソーシング・センター; Matsumoto, 2005d/2005e)に於いて検証した。更に12月米国ラスベガスで開催されたICISのスペシャル・インタレスト・グループであるSIGCCRIS(情報システム比較文化研究; Matsumoto and Wilson, 2005c)に於いて、⑥「グローバル情報システム戦略比較文化モデルの帰納的理論構築に関わる全過程」を、またIFIP8.2のワーキング・グループ・ミーティング(Matsumoto, 2005f)に於いて⑦「グローバル情報システム戦略の日本と西洋の根本的な差異」を検証した。本稿は、このグローバル情報システム戦略に影響を与える日本と西洋との文化の異質性を分析するために用いたグラウンデッド・セオリーによる帰納的理論構築の為のコーディング・プロセスの図形化、及び分析ツールの定型化に焦点を当てて説明する。この図形化と定型化の試みは、2005年4月フランス・パリで開催されたECRM(欧州ビジネス・マネジメント・スタディ・リサーチ・メソッド会議)に於いて発表を行った英語の論文(Matsumoto and Wilson, 2005b)を日本語に翻訳した上で、この会議でのフィードバックを基に加筆修正を加えたものである。

2. 多国籍企業のグローバル情報システム戦略比較文化分析

多国籍企業の国境を超えた経済活動、情報システムのグローバル展開、またそれによる文化の摩擦や変化は、グローバリゼーションの議論の中で重要なテーマとなっている(Herman, 1999; Ramsaran and Price, 2003; Venkat, 2003)。ビジネスの現場とアカデミックの世界(Easterby-Smith, Thorpe and Lowe, 1991)の両面から重要な意味を持つ情報システムの比較文化研究の分野(Usunier, 1998)では、研究者多くがHofstedeモデルを用い量的(例; Anderson and Hiltz, 2001; Kersten et al., 2002; Reinig and Mejias, 2002; Bagchi et al., 2003; Heales and Cockcroft, 2003; Navarrete and Pick, 2003)あるいは質的(例; Kwok, Lee and Turban, 2001; Bangert and Doktor, 2002)な実証主義的研究を行っている。然し乍、①Hofstedeモデルの立脚点が個々の国家には必ず単独の文化が存在するとしている点、また②Hofstedeモデルのスコアが30年以上前のものである為に老朽化している点から、グローバリゼーションの時代に於ける比較文化研究には不適切であるという批判がある(McCoy, 2003)。また、Karahanna, Evaristo and Srite (2004)とTan and Gallupe (2004)は、現在の情報システム比較文化研究の分野では研究手法の改善がされていないことと、理論構築に弱みがあることを指摘している。それに加えて、多国籍企業の情報システム戦略の比較文化に焦点を当てた研究は殆ど見当たらず、「グローバル情報システム戦略」と「文化」との関係性をシステムティックに解釈する事の出来るフレームワークは未だ存在しない(Matsumoto and Wilson, 2005a/2005b/2005c)。Glaser and Strauss (1967)が開発したグラウンデッド・セオリーは、この関係性を視覚化する理論構築に役立つと考えられる。グラウンデッド・セオリーは、教育学、看護学、心理学のみならず政治学あるいは情報システムを含む経営学にまで研究分野を拡大している(Strauss and Corbin, 1997; Myers, 1997; Goulding, 2002; Douglas, 2003)、情報システム分野に於けるグラウンデッド・セオリーを用いた解釈学的研究の成功例としてはOrlikowski (1993)のソフトウェア会社でのCASEツール導入に伴う構造変化に関する質的研究が有名である。グラウンデッド・セオリーは、研究者の先入観を限りなく排除しデータに純粹に立ち回り理論構築することで、極めて複雑に原因結果が絡み合った現象を明確に解釈することを目指している(Glaser and Strauss, 1967; Strauss, 1987; Haig, 1995; Pandit, 1996; Myers, 1997; Strauss and Corbin, 1998; Creswell, 1998; Locke, 2001; Goulding, 2002; Douglas, 2003; Gasson, 2004)。Strauss and Corbin (1998)のグラウンデッド・セオリーの説明によれば、その分析プロセスは一定の柔軟性は保持しつつも、極めてシステマ

ティックに確立された研究手法であることが解る。然し乍、グラウンデッド・セオリーは、コーディング・プロセスの定型化に弱みがあることが指摘されている (Gasson, 2004)。これは「同じデータによって同じ理論構築がなされるのか」、つまりデータ分析の過程に於ける反復可能性の脆弱性に対する指摘である。そこで本稿は、先ず始めにグラウンデッド・セオリー分析の基礎となるコーディング・プロセスの五段階を解説し、次にコーディング・プロセスの概念を図形化することによって理解を深め、更にグローバル情報システム戦略の比較文化研究に於いて CCCM-GSISM を構築する際に用いた分析ツールの定型化を説明する。

3. グラウンデッド・セオリーのプロセス

グラウンデッド・セオリーに関する主要な解説書 (Glaser and Strauss, 1967; Strauss, 1987; Haig, 1995; Pandit, 1996; Strauss and Corbin, 1998; Creswell, 1998; Locke, 2001, Goulding, 2002; Douglas, 2003; Gasson 2004) と、それを用いた論文 (Strauss and Corbin, 1997; Goede and Villers, 2003) から、グラウンデッド・セオリーの分析プロセスは下記テーブル 3 の五段階に纏めることができる。

テーブル 3: グラウンデッド・セオリーの五段階

段階	ステップ	行為
第一段階	研究のデザインの段階	
	ステップ 1	研究課題の明確化
	ステップ 2	研究するケースの選択
第二段階	ステップ 3	反復可能な明確なコーディング・プロセスの構築
	データを収集する段階	
第三段階	ステップ 1	データ収集の手順の構築
	ステップ 2	フィールドにおけるデータの収集
第四段階	データを分析する段階	
	ステップ 1	オープン・コード化
	ステップ 2	軸足コード化
第五段階	ステップ 3	選択コード化
	理論的飽和を行う段階	
第六段階	ケース 1	理論的飽和に達していない場合は第二・第三段階を繰り返す。
	ケース 2	理論的に飽和している場合は第五段階に進む。
第七段階	構築された理論を検証する段階	
	ステップ 1	相反する理論との比較
	ステップ 2	類似する理論との比較
第八段階	ステップ 3	構築された理論の批判的なグループへの説明

3. 1 第一段階：研究のデザイン

この段階では3つのステップを踏むことになる。先ずステップ1では「研究課題の明確化」を行うが、複雑な現象をその核心に迫った分析する為に研究を始める際には研究テーマはあまり絞り込まず広い範囲に柔軟性を保ちつつ設定をすることが重要である (Strauss and Corbin, 1998)。ステップ2は「研究するケースの選択」、ステップ3は「反復可能な明確なコーディング・プロセスの構築」となる (Gasson, 2004)。本稿が焦点を当てている部分がこのステップ3である。

3. 2 第二段階：データ収集

この段階では2つのステップを踏むことになる。ステップ1では「データ収集の手順の構築」を行い、ステップ2において「フィールドにおけるデータの収集」を行う (Strauss and Corbin, 1998)。つまり、先ず始めにデータ収集のプロセスを明確に定義した後にフィールドでのデータ収集に取り掛かるのである。その後、データの分析を行うと共に描き出されたトピックやケースの特性を活かす事のできるようにデータ収集の流れを随時修正・変更していく。データのサンプリングは理論構築の進捗を睨みながら同質的なサンプルから異質的なサンプルへと移行していく (Creswell, 1998)。

3. 3 第三段階：データ分析

この段階では3つのステップを踏むことになる。ステップ1は「オープン・コード化」、ステップ2は「軸足コード化」、ステップ3は「選択コード化」である (Strauss and Corbin, 1998; Creswell, 1998; Locke, 2001; Goulding, 2002; Douglas, 2003; Gasson 2004)。このコーディング・プロセスはデータから理論を帰納的に構築していくグラウンデッド・セオリーの中心的機能と位置付けられている。このプロセスで「カテゴリー」、「概念」、「次元」、「特性」、「出来事」が洗い出されていく。この間、研究を進めていく過程で浮かび上がってきた「概念」の内容やその関係性が徐々に明らかに成るに従って研究テーマを絞り込んでいくことになる。

3. 4 第四段階：理論的飽和

理論的飽和とは分析過程においてそれ以上新しい「カテゴリー」、「概念」、「次元」、「特性」、「出来事」が出てこなくなる状態と定義されている (Strauss and Corbin, 1998)。この理論的飽和状態に達したときに分析は終了する (Pandit, 1996)。第二段階のデータ収集と第三段階のデータ分析は理論的飽和に達するまで行われる。つまり、ケース1の「理論的飽和に達していない場合」は第二段階と第三段階を継続的に繰り返し、ケース2の「理論的に飽和している場合」は第五段階に進むことになる。Pandit (1996) は以下の図 3.4 のように理論的飽和に至るまでのプロセスを表現している。

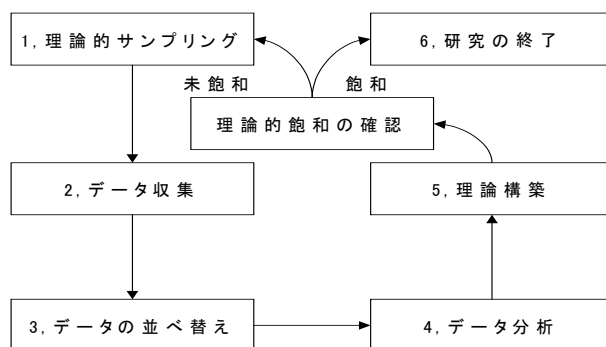


図 3.4：理論的飽和 (Pandit, 1996)

3. 5 第五段階：理論検証

グラウンデッド・セオリーの最終段階は理論検証である。相反する理論との比較によって構築された理論の内部メカニズムが改善され、類似する理論との比較によって構築された理論の外部理論との関連性が明確になる。更に批判的なグループに対して説明する事で、構築された理論は内部及び外部の両面に於ける整合性が高まるとされている (Pandit, 1996)。

4. グラウンデッド・セオリーのコーディング・プロセスの定型化

第3章で明らかにした通り、グラウンデッド・セオリーの五段階のプロセスの中の第三段階である「データを分析する段階」には、「オープン・コード化」、「軸足コード化」及び「選択コード化」という帰納的理論構築の中心的機能がある。それを行なう為に研究の初期段階でデータ分析に使用する反復可能な明確なコーディング・プロセスを構築する必要がある (Gasson, 2004)。そこで、本章では本稿の中心的課題であるグラウンデッド・セオリーのコーディング・プロセスの図形化と分析ツールの定型化を説明する。

4. 1 オープン・コード化

グラウンデッド・セオリーのコーディング・プロセスの第1ステップは「オープン・コード化」(Open Coding)である (Strauss and Corbin, 1999)。このオープン・コード化は、データに内在する「概念」と「特性」を継続的に比較分析することによって「カテゴリー」を洗い出す分析過程と定義されている。その為にオープン・コード化には「概念化」と「カテゴリーの発見」という2つの段階が存在する為に、ここではオープン・コード化に関しては2つの段階に分けて、そのプロセスを説明する。

4. 2 オープン・コード化のステップ1：概念化

4. 2. 1 定義

グラウンデッド・セオリーの理論構築過程の初期段階のオープン・コード化の第1ステップは「概念化」(Conceptualization)である。この概念化を行なう過程で、研究者は「現象」(Phenomena)から「概念」(Concept)を洗い出すことに専念することになる (Strauss and Corbin, 1999)。その事を行なう為に、研究者は記録されたデータを一言一言、一行一行分析することを行うことになる。この詳細分析の手法には大別して2つのテクニックがあり、①記録された文字に変化を加えることなく、そのままの言葉で使われたものを「イン・ピボ・コード」、逆に②記録された文字に変化を加えて概念を描写したものを「オープン・ラベル・コード」という (Strauss and Corbin, 1998; Douglas, 2003)。

4. 2. 2 図形化

「現象」とはデータに内在する「事柄」、「問題」、「課題」、「懸念」等である。収集されたデータに対して「何を」、「何処で」、「何時」、「誰が」、「どの様に」、「幾つ」といった簡単な質問を行う事で研究者はデータから現象を描き出す。その後、現象の比較分析を行い高いレベルからラベリングし種別化を行い、「ここで何が起きているのか」を捉えることで研究者は「概念」を洗い出す。「概念」は、グラウンデッド・セオリーの理論構築過程の基底部分を作り上げるブロックとなっていく (Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。図4.2.2は、ここで説明をした「概念化」のプロセスを図形化したものである (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

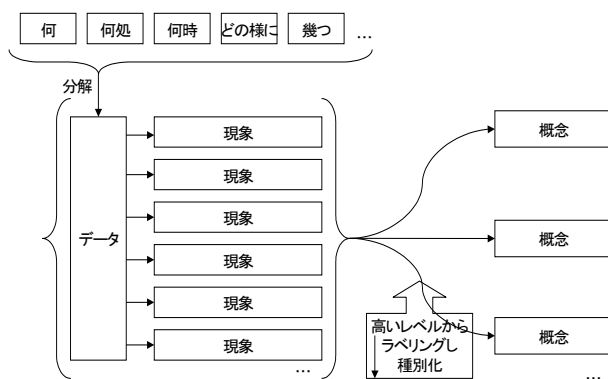


図 4.2.2 : オープン・コード化のステップ1: 概念化

4. 2. 3 定型化

以下の表 4.2.3 は、オープン・コード化における「現象の描写」の為に用いるテンプレートである。現象の部分に分解したデータを一つ一つ埋め込み、コードの形が「オープンラベルコード」なのか、あるいは「インビボコード」なのかを記述していく (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

表 4.2.3 : 「現象の描写」テンプレート

番号	現象	コードの形
1	分解されたデータ 1	オープンラベルコードあるいはインビボコード
2	分解されたデータ 2	オープンラベルコードあるいはインビボコード
3	分解されたデータ 3	オープンラベルコードあるいはインビボコード
...

以下の表 4.2.4 は、オープン・コード化において「概念の洗い出し」の為に用いられるテンプレートである。表 4.2.3 : 「現象の描写」テンプレートの中の「分解されたデータ」を分類した上で高いレベルからラベリングを行い、「概念の詳細」を一行一行記述していく (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

表 4.2.4 : 「概念の洗い出し」テンプレート

番号	概念
1	概念の詳細 1
2	概念の詳細 2
3	概念の詳細 3
...	...

4. 3 オープン・コード化・ステップ2: カテゴリーの発見

4. 3. 1 定義

オープン・コード化の次のステップは、概念を分類することによって「カテゴリー」(Category)を発見することである (Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。原文「Category」の主な日本語訳は「種類」、「種別」、「分類」等であるが、①グラウンデッド・セオリーに於ける「Category」は、これらに加えて「集団」、

「纏まり」、「集合体」の意味が含まれていること、また②この後のコード化の段階で「Subcategory」と「Core Category」という言葉が出てくることから、そのままカタカナ表示で「カテゴリー」と翻訳されている (Strauss and Corbin, 1999)。

4. 3. 2 図形化

各カテゴリーには「特性」、「次元」、「出来事」の3つの要素が内在している。「特性」(Property)は各カテゴリーの傾向性であり、各カテゴリーがどのような定義付けや意味合いを持っているかを描写する。「次元」(Dimension)は各カテゴリーの特性が変化する点であると定義されている。「出来事」(Incident)は特性及び次元との関係性から生じており、出来事の比較分析は各カテゴリーを洗い出す時に有効である (Strauss and Corbin, 1998; Creswell, 1998; Goulding, 2002)。次の図 4.3.1 はオープン・コード化のステップ2の「概念からカテゴリーの発掘」のプロセスを図形化したものである (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

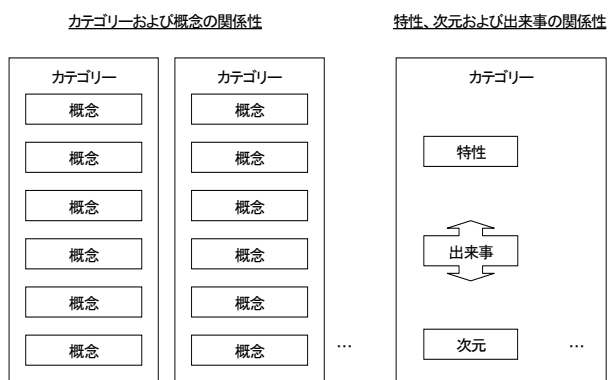


図 4.3.2 : オープン・コード化・ステップ2 : 概念からカテゴリーの発掘

4. 3. 3 定型化

以下の表 4.3.3 は、オープン・コード化の「概念からカテゴリーの発掘」の為に用いられるテンプレートである。表 4.2.4 : 「概念の洗い出し」テンプレートの中の「概念の詳細」グループ化することで、カテゴリーを発掘し、更に、それぞれのカテゴリーに内在する「特性」、「次元」、「出来事」の3つの要素を分析する (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

表 4.3.3 : 「概念からカテゴリーの発掘」テンプレート

	カテゴリーの詳細	
概念	1	概念の詳細 1
	2	概念の詳細 2
	3	概念の詳細 3

次元	次元の詳細	
特性	特性の詳細	
出来事	1	出来事の詳細 1
	2	出来事の詳細 2
	3	出来事の詳細 3

Strauss and Corbin (1998)によれば、オープン・コード化の段階では、概念間の関係性が未だ明らかに成っていない為、この時点でカテゴリー・リストを用いるように薦めている。軸足コード化の段階に入って初めて論理的なダイアグラムを作成するのが通例であって、オープン・コード化の早期の段階ではダイアグラムを使用することは稀である為、本研究ではオープン・コード化に用いるダイアグラムは作成しない事とした。

4. 4 軸足コード化

4. 4. 1 定義

「軸足コード化」(Axial Coding)は「カテゴリー」と「サブ・カテゴリー」との関係性を見出すプロセスと定義されている。「サブ・カテゴリー」(Subcategory)はカテゴリーの一種として位置付けられている。サブ・カテゴリーの中には、カテゴリーと同様、「特性」、「次元」、「出来事」の3つの要素が内在していると同時に、現象に関わる「何時」、「何処で」、「誰が」、「何故」、「どの様に」、「何と」、「その結果」、「そしてどうなったのか」等の問いに対する答えが内在している(Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。

4. 4. 2 図形化

「パラダイム」(Paradigm)は軸足コード化を行う時点でカテゴリーとサブ・カテゴリーとの関係性を見出す為に考案された分析ツールであり、その構成要素は「条件」、「行為・相互行為」と「結果」である。「条件」(Condition)は現象が起こりえる状況と定義される。条件とは、「何故」、「何処」、「何時」といった「どのような状況下なのか」を説明するものである(Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。

条件は「原因的」(Causal)、「介在的」(Intervening)、「帰結的」(Consequences)なものに分類される。「原因的条件」は現象に影響を与えるもの、「介在的条件」とは「原因的条件」が現象に与える影響を軽減あるいは増加させるもの、「帰結的条件」は現象から影響を受けたものと定義されている。

「行為・相互行為」(Action/Interaction)は、一定の条件の下で誰によってどのように反応が起きたのかを描写するものである。行為・相互行為は「戦略的」(Strategic)なもの、「日常的」(Routine)なものに分類される。「戦略的行為・相互行為」とは問題解決のために目的を持った行為であり、「日常的行為・相互行為」とは日常的な出来事に反応する為の日常的な行為である(Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。

「結果」(Consequence)は条件と行為・相互行為の生成物であり、「意識的」(Intended)か「無意識的」(Unintended)に分類される。期間が「短期」、「中期」、「長期」、可視性が「可視」か「不可視」、インパクトは「強い」か「弱い」か、予言性が「ある」か「ない」か、という観点から、「結果」を分析することができる(Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002)。

次の図 4. 4. 2 は軸足コード化に於けるカテゴリー、サブ・カテゴリー及びパラダイムとの関係性を見出すプロセスを図形化したものである(Matsumoto and Wilson, 2005b)。

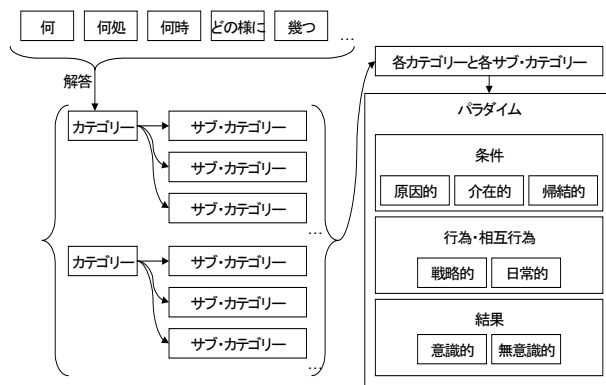


図 4.4.2：軸足コード化：カテゴリ、サブ・カテゴリ及びパラダイムの関係性

4. 4. 3 定型化

以下の表 4.4.3 は、軸足コード化に於いてカテゴリとサブ・カテゴリとの関係性を見出す為に用いられる「パラダイム分析」の為に用いられるテンプレートである。カテゴリの詳細は、表 4.3.3：「概念からカテゴリの発掘」テンプレートに記述された「カテゴリの詳細」から継承され、このパラダイム分析テンプレートを用いる事で、それぞれのカテゴリの「条件」、「行為・相互行為」、「結果」の詳細分析が可能となる (Matsumoto and Wilson, 2005b)。

表 4.4.3：「パラダイム分析」テンプレート

		カテゴリの詳細		
	パラダイム			
	条件	原因的・介在的・帰結的		
		何故		
		何処		
	何時			
	行為・相互行為	日常的あるいは戦略的		
		誰によって		
	どのように			
	結果	意識的あるいは無意識的		
		期間	短期、中期、長期	
		可視性	見える・見えない	
		インパクト	強い・弱い	
		予言性	予言可能・予言不可能	
		焦点	広い・狭い	
	メモ			

軸足コード化を行う際には、データの並べ替えを行いパズルの組み合わせの様な取り組みを行う必要がある為に、Strauss and Corbin (1998) はダイアグラムを使用する事を薦めている。カテゴリとサブ・カテゴリの関係性を描き出す初期的なダイアグラムは多種多様な関係性を分析するのに有効である。次の図 4.

4. 3はカテゴリとサブ・カテゴリとの関係性を描写する為に作成された軸足コード化に使用するダイアグラムである(Matsumoto and Wilson, 2005b)。

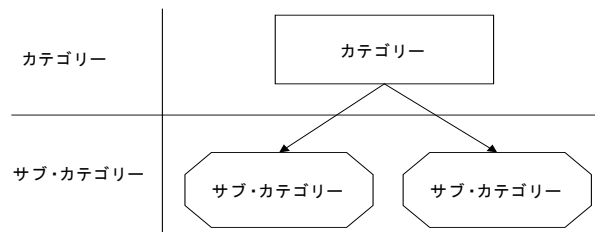


図 4. 4. 3 : 「カテゴリとサブ・カテゴリ」ダイアグラム

4. 5 選択コード化

4. 5. 1 定義

「選択コード化」(Selective Coding)は「理論を統合し精製する過程」と定義されている。オープン・コード化と軸足コード化とで洗い出された各カテゴリはデータの詳細説明を行うものであるが理論ではない。その為に、洗い出された多種多様な各カテゴリは理論を構築する為に「統合」され「精製」されなければならない(Strauss and Corbin, 1998; Pandit, 1996; Goulding, 2002)。

4. 5. 2 図形化

選択コード化には3つのステップがある。ステップ1は「中核となるカテゴリ」の発見、ステップ2は「理論の統合」、そしてステップ3は、「理論の精製」である。ステップ1における「中核となるカテゴリ」の決定は全ての「カテゴリ」のあらゆる組み合わせを考慮に入れて決定されなければならない。その手法としては、「説明書きを加える」、「図表を描く」、「メモを書く」、あるいは「コンピューターを使用して並び替える」等がある。次の図 4. 5. 2 は選択コード化に於ける「理論を統合し精製する過程」のプロセスを図形化したものである(Matsumoto and Wilson, 2005b)。

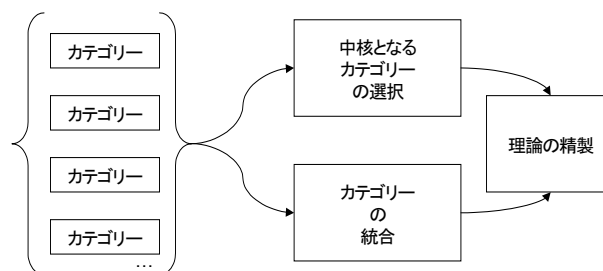


図 4. 5. 2 : 選択コード化: 理論の統合と精製

4. 5. 3 定型化

言葉から構成されているデータから、グラフィカルな形式に整えられた「理論」を描き出すのは極めて困難な作業である。しかし、Strauss and Corbin (1998)は主要な「カテゴリ」間の関係性を描写するためのダイアグラムの使用の重要性を強調している。次の図は「中核となるカテゴリ」を発見し、「理論」を統合・精製するプロセスである「選択コード化」に使用するダイアグラムである(Matsumoto and Wilson, 2005b)。

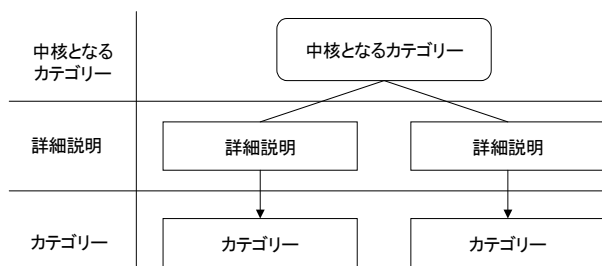


図 4. 5. 3 : 選択コード化・ダイアグラム

5. 結論

多国籍企業の国際的経済活動、情報システムのグローバル展開、それに起因する文化の変化はグローバリゼーションの議論の中で極めて重要なテーマであり (Herman, 1999; Ramsaran and Price, 2003; Venkat, 2003)、その理由から情報システムの比較文化研究は重要な意味を持つ (Matsumoto, 2004/2005a/2005b/2005c/2005d/2005e/2005f/2006a; Matsumoto and Wilson, 2005a/2005b/2005c)。然し乍、多くの情報システム比較文化研究が Hofstede モデルを用いた実証主義的研究となっているため (Matsumoto and Wilson, 2005c)、現在、この分野では研究手法の改善がされていないことと、理論構築に弱みがあることが指摘されている (Karahanna, Evaristo and Srite, 2004; Tan and Gallupe, 2004)。その結果、「グローバル情報システム戦略」と「文化」との関係性をシステムティックに解釈することのできるフレームワークは未だ存在しない (Matsumoto and Wilson, 2005a/2005b/2005c)。グラウンデッド・セオリーは、この関係性を視覚化する理論構築に役立つ。本稿は実際のデータ収集及びデータ分析を開始する前段階としてグラウンデッド・セオリーの弱点である反復可能性を補強する為、コーディング・プロセスの図形化と分析ツールの定型化を試みた。表 5.1 は、各「オープン・コード化」、「軸足コード化」及び「選択コード化」の段階で使用する為を作成したテンプレートとダイアグラムの数を表している。

表 5.1 : 作成したテンプレートとダイアグラムの数

	テンプレート	ダイアグラム
オープン・コード化	3 種類	なし
軸足コード化	1 種類	1 種類
選択コード化	なし	1 種類

本稿で論じたグラウンデッド・セオリーの図形化されたコーディング・プロセスの定型化された分析ツールは、グローバル情報システム戦略の比較文化研究だけに留まらず、解釈学的な他の情報社会学研究に於いても再利用の可能性があると考える。

【注】

本研究はグラウンデッド・セオリーのデータ収集手法である理論的サンプリング (Strauss and Corbin, 1998; Goulding, 2002) に基づき収集したデータを、本稿で定型化されたテンプレート及びダイアグラムを用いて理論構築を行った (Matsumoto, 2005b; Matsumoto and Wilson, 2005a)。構築された「グローバル情報システム

戦略比較文化モデル(英語名: Cross-Cultural Comparison Model of Global Strategic IS Management; 英語略名: CCCM-GSISM) を基に、日本(Matsumoto, 2005c/2005f)、シンガポール(Matsumoto, 2005d/2005e)、英国、スイス及び米国の「文化」と「グローバル情報システム戦略」との関係性の分析を行った。理論的飽和に達したフレームワーク「スポンサー確定理論」(英語名: Fixed Sponsor Model; 英語略名: FSM; Matsumoto, 2006a)は「グローバル情報システム戦略」と「文化」との関係性を、ビジネス・モデル、組織管理構造、人的資源管理、情報システム・マネジメントの4つの観点から描き出している。

【謝辞】

先ず、「第四回欧州ビジネス・マネジメント・スタディ・リサーチ・メソッド会議」(The 4th European Conference on Research Methodology for Business and Management Studies) のグラウンデッド・セオリー・ミニ・トラックに於いて本研究(Matsumoto and Wilson, 2005b)に極めて重要なフィードバックを下された、英国ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの Mitleton-Kelly 博士、英国マンチェスター大学の Mann 博士、そして英国スタフォードシャー大学ビジネス・スクールの Douglas 博士に感謝の意を表したいと思います。

また、翻訳を行う時点で日本語に翻訳されたグラウンデッド・セオリーの文献を参照致しました。約三年間の歳月をかけて Strauss A. and Corbin J. (1998), “Basics of Qualitative Research” を翻訳をされたグラウンデッド・セオリーの先駆的分野である看護学研究者の南裕子様、操華子様、森岡崇様、志自岐康子様、竹崎久美子様に対しまして感謝の意を表したいと思います。

【参考文献】

- Anderson W. N. and Hiltz S. R. (2001), “Culturally Heterogeneous vs. Culturally Homogeneous Groups in Distributed Group Support Systems: Effects on Group Process and Consensus”, Proceedings of the 34th Hawaii International Conference on System Sciences (2001), IEEE
- Bagchi K. et al. (2003), “The influence of national culture in information technology product adoption”, Ninth Americas Conference on Information Systems, AIS, 2003, pp. 112 - pp. 131
- Bangert D. and Doktor R. (2002), “The Role of Organizational Culture in the Management of Clinical e-health Systems”, Proceedings of the 36th Hawaii International Conference on System Sciences, 2002, IEEE
- Creswell J. (1998), “Qualitative Inquiry and Research Design, Choosing Among Five Traditions”, SAGE Publications
- Douglas D. (2003), “Inductive theory generation: A grounded approach to business inquiry”, Business School, Staffordshire University, UK. MCIL 2003
- Easterby-Smith M., Thorpe R. and Lowe A. (1991), “Management Research, An Introduction”, SAGE Publications, Inc
- Gasson S. (2004), “Rigor in Grounded Theory Research: An Interpretive Perspective on Generating Theory from Qualitative Field Studies”, The Handbook of Information Systems Research, Idea Group Publishing
- Glaser G. and Strauss A. (1967), “The Discovery of Grounded Theory: Strategy for qualitative research”,

Aldine De Gruyter

- Goede R. and Villers C.D. (2003), “The applicability of Grounded Theory as Research Methodology in Studies on the use of Methodologies in IS Practices” , Proceeding of SAICSIT 2003, Pages 208–217, ACM Press New York
- Goulding C. (2002), “Grounded Theory, A practical Guide for Management, Business and Market Researchers” , SAGE Publications Ltd
- Haig B.D. (1995), “Grounded Theory as Scientific Method” , University of Canterbury,
http://www.ed.uiuc.edu/EPS/PES-yearbook/95_docs/haig.html
- Heales J. and Cockcroft S. (2003), “The Influence of National Culture on The Level and Outcome of Is Decision Making in the IS Evolution/ Redevelopment Decision” , Ninth Americas Conference on Information Systems, AIS, 2003
- Herman E. S. (1999), “The Threat of Globalization” , Professor Emeritus of Finance, Wharton School, University of Pennsylvania, April 1999
- Karahanna E., Evaristo R. and Srite M. (2004), “Methodological Issues in MIS Cross-Cultural Research” , The Handbook of Information Systems Research, Idea Group Publishing
- Kersten G.E. et al. (2002), “The Effects of Culture in Anonymous Negotiations: Experiment in Four Countries” , Proceedings of the 35th Hawaii International Conference on System Sciences, 2002, IEEE
- Kwok R.C., Lee M. and Turban E. (2001), “On Inter-Organizational EC Collaboration The impact of Inter-Cultural Communication Apprehension” , Proceedings of the 34th Hawaii International Conference on System Sciences (2001), 2001, IEEE
- Locke K. (2001), “ Grounded Theory in Management Research” , SAGE Publications Ltd
- Matsumoto H. (2004), “Cross-Cultural Comparison of IS Globalisation from the view of IS Strategy and Implementation in the Financial Industry” , the conference proceedings of the forty sixth annual conference of the UK Operational Research Society, Section B, Information Systems, Code: ISS05, York, U.K., September 2004
- Matsumoto H. and Wilson D.W. (2004), “Strategic Information Systems Planning for Globalisation in the Financial Industry: Cross-cultural Comparison between a Swiss/American Financial Institution and a Japanese Financial Institution in London, Tokyo and Singapore” , the conference proceedings of Organizations and Society in Information Systems (OASIS) Workshop, IFIP8.2, Washington, U.S.A., December 2004
- Matsumoto H. (2005a), “Cross-Cultural Comparison Model of Global Strategic IS Management in Investment Banks” , the conference proceedings of UK Academy for Information Systems (UKAIS), PhD & Professional Doctorate Consortium, Newcastle upon Tyne, U.K., March 2005, pp.4 – pp.8
- Matsumoto H. (2005b), “Cross-Cultural Comparison of IS Globalisation from the view of IS Strategy and Implementation in the Financial Industry” , OR Newsletter, February 2005, No. 410, pp 25 – pp.26
- Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005a), “Application and Validation of the emerged Cross-Cultural

- Comparison Model with Similar and Cconflicting SISP Models”, the conference proceedings of UK Academy for Information Systems (UKAIS), 10th Annual Conference, Newcastle upon Tyne, U.K., March 2005, pp. 6
- Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005b), “Testing a Rigorous Execution of Grounded Theory Using Comparative Cross-cultural Case Studies of Strategic Global IS Management in Investment Banks”, the conference proceedings of the 4th European Conference on Research Methodology for Business and Management Studies, Paris, France, April 2005, pp.323 - pp.336
- Matsumoto H. (2005c), “Impact of Japanese Traditional Culture on Global IS Management”, the conference proceedings of Pacific Asia Conference on Information Systems (PACIS), Bangkok, Thailand, July 2005, pp. 1477 - pp.1484
- Matsumoto H. (2005d), “Globalization and IT/IS Outsourcing in the Multinational Investment Banking Industry”, the conference proceedings of 4th Annual International Outsourcing Conference, Washington, U.S.A., September 2005, pp.104 - pp.110
- Matsumoto H. (2005e), “Global Business Process/IS Outsourcing to Singapore in the Multinational Investment Banking Industry”, Journal of Information Technology Cases and Applications Research (JITCAR), Volume 7, Number 3, Research Article One, pp.4 - pp.24
- Matsumoto H. (2005f), “Fundamental Difference of Global Strategic IS Management between the Japanese and Western Investment Banks”, the conference proceedings of Organizations and Society in Information Systems (OASIS) Workshop, IFIP 8.2, Las Vegas, U.S.A., December 2005
- Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005c), “Inductive Theory Building to Visualize Cultural Differences between Japanese and Western Multinational Investment Banks from the Perspective of Global Strategic IS Management”, the conference proceedings of the 13th Annual Cross-Cultural Meeting in Information Systems, An official meeting of the AIS Sponsored Special Interest Group SIGCCRIS, Las Vegas, U.S.A., December 2005
- Matsumoto H. (2006a), “Cross Cultural Research in IS: Finding the Fixed Sponsor Theory”, School of Computer Science and Information Systems, Research Day, London Knowledge Lab of the University of London, London, U.K., January 2006
- McCoy S. (2003), “Integrating National Culture into Individual IS Adoption Research: The Need for Individual Level Measures”, Association for Information Systems (AIS), Americas Conference on Information Systems 2003
- Myers M.D. (1997), “Qualitative Research in Information Systems,” MIS Quarterly, June 1997
- Navarrete C.J. and Pick J.B. (2003), “Cross-cultural Telecommuting Evaluation in Mexico and United States”, Ninth Americas Conference on Information Systems, 2003
- Orlikowski W.J. (1993), “CASE Tools as Organizational Change: Investigating Incremental and Radical Changes in Systems Development”, MIS Quarterly, Vol 17, No. 3, September, 1993
- Pandit N.R (1996), “The Creation of Theory: A Recent Application of the Grounded Theory Method”, The Qualitative Report, Volume 2, Number 4
- Ramsaran D. and Price D.V. (2003), “Globalization: A Critical Framework for Understanding Contemporary

松本秀之、デービッド W. ウィルソン

「グローバル情報システム戦略比較文化研究に用いる

グラウンデッド・セオリー・コーディング・プロセスの図形化と分析ツールの定型化」

Social Processes” , Volume 3: Issue 2, Globalization Archives

Reinig B. A. and Mejias R. J. (2002), “An Investigation of the Influence of National Culture and Group Support Systems on Group Processes and Outcomes” , Proceedings of the 35th Hawaii International Conference on System Sciences, 2002, IEEE

Strauss A. (1987), “Qualitative Analysis for Social Scientists” , Cambridge University Press

Strauss A. and Corbin J. (1997), “Grounded Theory in Practice” , SAGE Publications, Inc

Strauss A. and Corbin J. (1998), “Basics of Qualitative Research” , SAGE Publications, Inc

Strauss A. and Corbin J. (1999), “質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリーの技法と手順” , 南裕子 (翻訳), 操華子、森岡崇、志自岐康子様、竹崎久美子 (訳)、医学書院 ISBN: 426034353X

Tan F. B. and Gallupe R. B. (2004), “Global Information Management Research: Current Status and Future Directions” , The Handbook of Information Systems Research, Idea Group Publishing, IV, Global Issues, Chapter XII

Usunier J. C. (1998), “International & Cross-Cultural Management Research” , SAGE Publications, Inc

Venkat K. (2003), “Thinking Small: Globalization and the Choice of Technology” , Orion Online, March, 2003